

## 侵略・犠牲・残忍

植村利夫

東京市瀧野川區西ヶ原町<sup>310</sup>

Invasion, Sacrifice, Brutality. By **Toshio Uyemura**

### I. 侵略 Invasion

オニグモやコガネグモ等の網の端に *Argyrodes* 等と共に居候生活をしてゐるアシナガグモ *Tetragnatha praedonia* L. Koch の幼蛛はよく見受ける所であるが、小生は今夏歸郷中更に次の様な事を觀察した。

時恰も八月中旬とて第三回の脱皮を終へたばかりのデョラウグモの幼蛛が到る所の梢に直径 20—30cm の綺麗な丸網を張つてゐた。所が不圖見ると其の中二三の網の中央にアシナガグモの亞成蛛が頑張つてゐる。注意して見ると驚いた事に此の網の主人公が突然の侵略者である此のアシナガグモに斃されて遺骸は網の端に吊されてゐた。そして殺戮者が主人公になりすまして網の中央に頑張つてゐるのであつた。これには聊か義憤を感じたが大いに顔負けせざるを得なかつた。

其の翌朝である。庭木の枝から枝に張り渡された實に大きな直径2米もありさうな或蜘蛛の丸網に多数のアシナガグモが集つてゐるので異様に感じた小生は其の頭数を数へてみた所實に18頭も居ることがわかつた。一つの網にこんなに多数の同一種類の蜘蛛が集つてゐた事は恐らくこれがレコード破りだと思ふ而も彼等は何らの集團生活を營む爲に集つたのではない。何れも恐るべき侵略者が偶然に相會したと見るべきである。恐らく人間社會に於て18人もの殺人強盜が偶然に或る一軒の家で會合する事が無いであらう。而しお互の間に烈しい格闘が演じられないのは寧ろ不思議である。

## II. 犠 牲 Sacrifice

同じく本年八月歸郷中の事である。晝寝起きのだるい身體を縁側に横たへてゐると、ふと柱の隅に土で造られた丸いツクリバチ（種名不詳）の巢を見出した。指頭大に丸く土瓶の様な形に造られた巢を見ると蜂の勞力と本能に敬意を表さざるを得ない。中には云ふまでもなく愛兒が産みつけられてゐるのである。心ある士は靜かに此の土瓶の蓋を毀さずに置くだらう。而し玉手箱の内部を穿鑿してみたいのは人間の慾望である。可愛さうだと思つたが思ひ切つて親指でつぶしてみた。途端中からころころと落ちて青色のものがあつた。見るとそれは最後の脱皮も近づいた亞成虫のドウグモ *Meta doenizi* Boesenberg et Strand であつた。見よ、まだ息の根が絶えてゐない様である。じつと見てゐると今にも這ひ出しさうである。事實此の蜘蛛は麻醉させられてゐるのみで本當の死には至つてゐないのである。更によく觀察した時此の蜘蛛の腹部背面に長さ 3mm. 位の小さなウジムシの様な幼蟲が喰ひついてゐる。云ふまでもなく蜂の子供である。其の儘そつと管瓶に入れておいたが一週間の後には蜘蛛も幼蟲も乾燥してしまつてゐた。若し小生が此の惡戯をしなかつたならば此の幼蟲が此の蜘蛛の營養分を吸つて無事に成長する事は請合であるし、犠牲者の蜘蛛は此の幼蟲が成長するまで腐敗しないでゐて次第に血と肉を吸ひとられて行くのである。巧妙なる自然界の犠牲は更に小生の爲に犠牲の二重曲を演じさせられたのである。其の頃自己の使命を完全に果した親蜂は安心して野外に楽しく餘生を送つてゐた事であらう。

## III. 殘 忍 Brutality

昨年の八月であつた。東京市西ヶ原の或住宅の板塀の下に默然として網の繕ひをしてゐた一匹のオホヒメグモ *Theridion tepidariorum* C. L. Koch をよく見ると腹部背面に矢張り長さ 3mm. 位の蜂の幼蟲が寄生してゐた。蜘蛛はそれでも元氣である。靜かに管瓶の中に入れて持ち歸り机上に置いて數日間それを觀察した。幼蟲は日一日と太つてゆく事は目に見えて明らかであつた。時々

蜘蛛の腹背を運動する事もあるがすぐ又喰ひついて生きた血と肉を吸ひとるのである。蜘蛛はそれでも割合元氣であつた。而しそれから一週間程経た日蜘蛛は急に身體の自由を失つてしまつたのである。見ると幼蟲は最初見た時の2倍位の大きさに成長してゐた。そしてずんずんと血液を吸ひとつてゐるのである。生きたものゝ血を吸ひとつて遂に之を死に至らしめる。世にこれ程殘虐があらうか。ボールに空氣を入れる時と反對にオホヒメグモの腹部は眼に見えて細つて行つた。そして其の日の夕方蜘蛛は遂に嚙碎かれた皮膚の斷片をのみ残して前日夕方の元氣な姿は消失してゐたのである。罪なくして血液の搾取者に寄生され、尙且つ生きんが爲にせつせと網の繕ひをしてゐた数日前の可憐なオホヒメグモが、今は皮膚の殘骸をのみ残して消失してゐるのを見た時、予は只自然界の矛盾した犠牲者の靈に涙乍らの默禱を禁じ得なかつた。其の頃蜂の幼蟲はせつせと繭を造つてゐた。翌日見ると可愛い米粒の様な黄白色の繭が出来てゐた。此の繭から見て蜂はコマユバチの類であらうと思つた。それから二三日して小さな蜂の成蟲が管瓶の中を飛び廻つてゐた。此の蜂の標本は種名を誰かに同定していただくために加藤氏にお預けしてある。

侵略——犠牲——殘忍、自然界にもこうした極端な道德上の矛盾が宿されてゐるのである。(昭和十二年九月十五日記)

### これは便利な武藏野博物の會生る

本會評議員岸田久吉氏、同幹事加藤正世氏、理學博士牧野富太郎氏等の御盡力によつて今回武藏野電車沿線の自然界を研究する武藏野博物の會が生まれました。此の會の特徴とする所は入會金一圓を收めておけば終身會員の特權を附與され、動物でも植物でも鐵物でも地質でも自分の好きな方面は何でも指導を受けられる事である。而も會員は會員章を持參する事によつて武藏野電車全線の割引を受ける資格を與へられる。それはたとへ採集に行くのでなくとも割引されると云ふのだから、これ程便利で有益な會が他にないと思ひます。在京並に近府縣の會員諸君は進んで御入會あらん事を希望します。詳細は加藤幹事に御照會を乞ふ。(植村利夫記)